

水辺に親しみ、流域治水を川を知り、学び、まちを守る

水辺に親しむことを通じて、官民一体となって取り組む流域治水について考える「ミズベリングの流域治水シンポジウム@淀川」(近畿地方整備局淀川河川事務所主催)が2月22日、京都市内で開かれた。基調講演やパネルディスカッションが行われ、約100人が参加。研究者、建築家、自治体職員など、幅広い分野の人が意見交換した。

ミズベリング的 流域治水 シンポジウム@淀川

「流域治水にTRY」

ラグビー場を流域治水の聖地に

東大阪市上下水道局下水道部計画課 主任 長村 翔氏

東大阪市は、中小企業が集積するモノづくりのまちで、事業所数は全国で5位になる。もし、災害により操業が停止することで、国内外問わず、大きな影響が出る可能性がある。市域は、北を淀川、南を大和川、東を生駒山系、西を上町台地に囲まれた環状流域に位置する。この地域は、すり鉢状の地形で流域面積の4分の3は、降った雨が自然に河川に排出されない厳しい地形条件となっている。そこで、国と府、流域関係11市が協力して淀川流域総合治水対策に取り組み、地下河川などの流す施設や遊水地などの水を一時的に貯める施設を建設している。同時

市独自の対策として、既設の下水管のさらに深くに埋管補完というトンネルのような管を整備することで流下能力をアップ。ラグビーの聖地、花園ラグビー場として知られる花園中央公園内に遊水地と調節池の2つの貯める施設を整備した。平成30年7月豪雨の際には、これらの治水施設が効果を発揮。同等規模の雨が降った平成元年9月の浸水被害は191件だったが、それが0件に抑えられた。公園は、ラグビーだけでなく流域治水の聖地にもなっている。

「ミズベリング的流域治水とは？」

みんなと一緒にやっていきましょうというのが流域治水

株式会社水辺総研代表取締役/主任研究員 岩本 唯史氏

ミズベリングとは、水辺とまちが一体となった景観やにぎわいの創出など、新しい水辺と社会の関係を生み出すという活動で、ここ10年くらい取り組んできた。以前は、水辺を使おうと思っても、なかなか許可が下りない「管理された空間」だった。それが、平成23年に規制緩和があり、今まで駄目だったものが、「やっといういよ」と変わった。これまで民間が使ってはいけないと言われていた川も、手続きを踏めば、民間も使える時代になった。水辺で活動している人間にはものすごく大きなニュースで、それを全国に伝えようと思ったのがミズベリングだ。

ミズベリングは、ゼロから何かを作っていくことで、それは流域治水のテーマにも含められているのではなかと思う。これまで堤防は、「水がもれない」という前提で整備されてきた。それが災害の激化によって、「もれるかもしれない」ということが前提になってきた。だから、みんなと一緒にやっていきましょう、というのが流域治水のなだと私は受け止めています。こうした前提の変化は、これまでできなかった社会的課題を解決するチャンスかもしれない。そんなワクワク感を持ってみなさんとやっていきたい。

「誰もが取り組める“小さな流域治水”」

やらされ流域治水から、やりたい流域治水へ

滋賀県立大学環境科学部 環境政策・計画学 准教授 瀧 健太郎氏

みんながわくわくしながら流域治水に参加できる事例として、近江八幡市立立瀬小学校で取り組んでいる環境学習、防災学習をたびたび紹介している。学習ではまず、池田川で魚つかみをしてもらい、川の中のことを知ってもらう。2週目は、「みんなの住んでいるところは、川より少し高いところにあるよね」と川や堤防を含めた地域の在り方を説明。そして、「来週から防災の授業をするので、自分の家から避難所の小学校にちゃんと逃げられるか、チェックしておいて」と課題を出す。すると、子供たちは普段見ている通学路で、洪水を想定してこんな様子になるのだからと視点を変えて歩くようになる。「この水路に水があふれたら、うちのおおあちゃんも落ちるのでは」とか、いろいろ見つけてくる。最後に、それをマップにまとめて発表会をする。こうした川での学習では、治水のことだけでなく、利水のことも環境のことも教えられる。自分の目で

見ると、子供たちは自分のまちのことを考えられるようになる。その子供たちが10年後、20年後にも、その地域にいてくれると、それがまちづくりにつながっていく。これこそ、流域治水だと思ふ。

「小さな自然再生をサポートしてもらいたい」と徳島県神山町から声がかかり、現地に行ったときのこと。地元の人、「この森を守ることに、棚田を守ることに川が川になる」と言っていた。この地域では昔からの林業、農業も続いている。流域治水。みんなが地域資源と暮らしを守る。これが流域治水の本質なのではないか、と思った。みなさんにも身近な水辺を経験してもらい、そこを守ったり、災害を防いだりすることを考えてもらえれば、それが流域治水ではないかと考えている。

「明るく楽しく みんなで流域治水」

「楽しい」に、防災の視点を

岩本 自己紹介を兼ねて、みなさんの活動を。

奥谷 まちなかの水辺の価値と魅力より多くの人に知ってもらおうと、SUP(スタンドアップパドルボード)を中心にスクールやツアーを有料で開催している。遊覧船のネオン看板の下で記念撮影したり、大きい円形タイプに乗って水上で食事したり。最近は活動範囲が広がってきた。

長村 下水道は一般の人に見えないところにあるので、どう伝えたいかが難しい。ケーブルテレビの広報番組で毎年1回、特集番組を組んだり、YouTubeに動画を上げていたり。Bマンホール開けてみたという短い動画は、1万回以上再生された。

北村 私は博物館の学芸員で、自然や川をきっかけに、わくわくしたり、ときどき驚かすような仕事活動をしている。自分がおもしろいなと感じたものをたくさんの人に伝えたい。治水や利水も身近に感じてもらえればと思って、認定習得者としても作った。

近藤 私は大阪の生物多様性に関する調査を行っている。また、子供たちを対象としてセンターの敷地内の池で生き物を捕まえて、観察する体験をさせてもらっている。水の中に何があるのか体験して知ってもらうことが、川に親しくしようというきっかけになれば。

田中 淀川河川事務所は淀川本川と桂川、宇治川、木津川までを管理、整備している。調査課では堤防の高さをどれくらいにするかなどを計画している。また、一般の人に淀川の歴史や整備について説明するようなこともさせてもらっている。

岩本 その他の活動や今後やってみたい活動は。

奥谷 平成30年に山間部の真備町で川が氾濫し、まちが水に浸ったとき、ほほ家の1階が浸かっている状態だったが、ゴムボートで十数人を救助することができた。SUPのように普段、遊んでいる道具を持って防災訓練みたいなことができればいい。

長村 淀川流域は地盤が低く、どうしてもポンプを使わないと排水できないところがある。内水氾濫の対策をしている。

北村 川を行政に任せるとは、自分たちも地域の一員としてできる役割がある。それを楽しく議論していくのも流域治水のヒントになると思う。

田中 防災や避難の話を伝えるのは難しく、水害が起きないと危機感を持たない。みなさんの活動の中で、ちょっとしたことでいいと思うこと、伝わりやすいのではと思う。

近藤 専門家の力だけでは難しいので、市民のみなさんの力を借りて調査をしてくれたら、SUPで生き物調査など、楽しみながら生き物や川に目を向けてもらえるような仕掛けができればいいなと思う。

岩本 まずは「知る」ということ。そして、自然のおかげで暮らしているという感謝の気持ちがある。その気持ちから多くのコロナ禍を生んできたことが大切だ。

瀧 「楽しかった」に、ちょっと防災の視点が入るだけで、大きく社会が変わっていくのではない。流域治水のために何かやらなければいけないと思うなくても、無意識に自分の責任を果たそうと思う人が増えれば嬉しい。流域治水が進むと思う。